

（2）点数化できない才能と、未来を拓く心の力

従来の点数評価では見えにくい挑戦力や協働力、創造性といった非認知能力に着目し、授業や活動の過程を観察・記録して可視化することで、子ども一人ひとりの努力や工夫、課題解決のプロセスを教育評価に反映させ、未来を自ら切り拓く力を育成する新たな実践指針と捉えています。

① 従来の評価基準を超える視点

子どもの力はテストの点数だけで測れない。日常の姿勢や協働、挑戦の過程にこそ本質があり、教育の新基準ではこれらを評価の中心に据える必要があります。

ア 行動観察のシンクロ

授業中の子どもの姿勢や発言、協働の様子を多角的に観察することで、点数だけでは見えない学びのプロセスや非認知能力を捉え、教育活動に反映します。

（ア） 授業中の観察記録（行動の可視化）

内 容：集中度、発言、友人との関わりを観察して簡潔に記録・共有する。

ねらい：点数では測れない思考力や協働力を把握する。

新基準：授業中の取り組みや協働の様子、挑戦の努力を記録して、思考力や協働力、粘り強さを見える化する。

（イ） 協働チェック表（貢献度の確認）

内 容：グループ活動中、役割や貢献をチェック表で記録し振り返る。

ねらい：協働行動を具体的に見取る。

新基準：グループでの達成度や貢献の仕方を観察し、振り返りや自己評価シートに反映させることで協働力を育成する。

イ グループ学習の自己点検

グループ学習で自分の役割や行動の振り返りで、自己理解と協働力を深めることができ、学びの過程を認識することで、非認知能力を育成となります。

（ア） 自己評価シート（自分の振り返り）

内 容：自分の役割や行動を振り返り、達成度や課題を記録する。

ねらい：自己認識と課題意識を高める。

新基準：目標に向かう行動を計画し、途中での課題や失敗に応じて自分で改善策を考え実行する力を伸ばす。

（イ） 相互評価ワーク（仲間の視点で学ぶ）

内 容：グループメンバー同士で貢献度や協力度を評価し言語化する。

ねらい：他者の視点で自分を見つめ、学びを深める。

新基準：グループ活動での発言や役割分担、仲間への支援行動を観察し、成長の指標として評価する。

② 非認知能力と未来への直結性の強調

子どもが課題に挑戦し、協働や振り返りを通して成長する経験を重視し、レジリエンスや創造性など非認知能力が未来を切り拓く力となることを示します。

ア 課題解決型学習で挑戦経験

子どもが自ら課題を発見し、試行錯誤しながら解決する経験を通して、レジリエンスや創造性を育むと共に、未来を切り拓く力として非認知能力を実践的に高める新基準の教育と捉えています。

(ア) 挑戦プロジェクト（挑戦力育成）

内 容：小さな課題から大きな課題まで、自分で解決策を考え実行する。

ねらい：困難に立ち向かう力を育てる。

新基準：失敗体験や困難の克服過程をポートフォリオや振り返りシートに記録し、努力や回復力を非認知能力として評価する。

(イ) 失敗振り返りシート（学びの言語化）

内 容：挑戦での失敗や工夫を振り返り、学びを言語化する。

ねらい：失敗を成長の機会として認識する。

新基準：振り返りシートやポートフォリオを活用し、自分の取り組み方を見直し改善する習慣を通して非認知能力を育む。

イ 異学年・地域との協働活動

異なる学年や地域の人々と協働する経験を通じて、社会性や協働性を育み、多様な価値観に触れることで創造性を広げ、未来を生き抜く力を強化します。

(ア) 地域共同プロジェクト（社会性育成）

内 容：地域課題の解決やイベント運営に学年を越えて参加する。

ねらい：他者との協力で成果を生み出す力を育む。

新基準：グループ活動での発言、役割分担、仲間への支援行動を観察・記録し、協働力や信頼関係を見る形で評価する。

(イ) 異学年交流ワーク（多様性理解）

内 容：学年を超えたチームで課題解決や創作活動を行う。

ねらい：異なる視点を理解し、新たなアイデアを生む力を育む。

新基準：グループや個人の課題解決過程でのアイデアの工夫やチーム内での役割分担・協力行動を観察し、評価に反映する。

③ 学びの過程を可視化する評価の仕組み

非認知能力は、授業や活動中の行動観察に加え、ループリック評価や自己評価、相互評価、振り返りシートやポートフォリオを活用して評価できます。挑戦や工夫の過程等を可視化し、努力や成長を教育評価に反映する方法です。